東日本大震災　被災地宮城県(宮城支部)を訪れて
広陵分支部長　奥本 仰一

２０１１東日本大震災で甚大な被害を受けた東北地方の一つ宮城県を、秦師範や他の黒帯の面々と共に１０／８(土)に訪れた。秦師範の旧知のお知り合いである宮城県支部長村上成之師範の近況と、当時の爪痕がなお残る現状を一目見て聞いて肌で何かを感じたい！今しかない！！という思いで参加させていただいた。
長時間車を走らせて村上師範の自宅に到着し、道場を見学させてもらった時、師範も家族の方も明るく元気で町の状態もかなり現状を回復していて、驚いたと同時に安堵した。
が、師範に案内して頂き海のほうに車を走らせると、師範のお話の内容そのものの景色が広がっていて現状を回復した市街地とは１８０度違った状況に唖然とした。
見渡す限りに痛んだ道路と何もかも流されて更地になってしまった土地。
あちこちにある瓦礫の山、又、山。潰れた大型トラックが数十台横たわっている。
津波の威力で窓がなくなり屋根が壊れて外観だけが残ったモダンな住居もあった。
外観どころかすべて流されてコンクリートの基礎だけが残った住居跡、傾いたままの電柱、同じく地面や田んぼには津波で流された多くの漁船が横たわる。
テレビのニュースに度々映っていた場所が目の前に飛び込んでくる現実に只々愕然とするのみだった。たった数分で全くの別世界が広がっていた。

村上師範曰く。

『つい最近まで私の家のすぐそこに漁船が横たわっていたんだよ。ここまで津波が到達してね。だから私の家とここから西はぎりぎりセーフだったんだ。でも道路は海水で水浸し、ライフラインは止まって、車も全く通っていない状況で約３カ月はゴーストダウンだった。』
少ししか離れていない師範の家とその市街地に活気が戻ってきているだけに、大変失礼な言い方になるかもしれないが、明暗を分けたこの地域はあまりにも悲惨極まりなく、運が悪かったというか、酷であるとしか言いようのない現状に思えた。
その後、宮城支部本部道場にて、奈良支部で集まった義援金が秦師範から村上師範へと贈呈された。

その時、村上師範がお礼の言葉と共にこうお話しされた。

『私の道場生の身内で津波に流されて亡くなった方がいます。自宅が流されて現在アパートなどへ移住された方も１４～５名います。私には何もできないしどうすることも出来ない。このお金はこのまま被災した方々に必ずお渡しさせていただきます。』

話されている間に感極まり言葉に詰まられた様子を見て、普段温厚で明るくにこにこされているであろう師範だけに、自分もグッと胸が熱くなった。
そして、自分がそういう師範の立場になったら‥もし自分が直接の被災者になったら‥と考えさせられた。
今回の宮城での見聞は、無意識のうちに自然と自分に照らし合わせて考える機会となったことは事実である。

最後に、この震災で犠牲になられた多くの方に追悼の意を捧げますと共に、被災された方々、並びに宮城支部関係者各位に改めてお見舞い申し上げます。

一日も早い復興を祈念させていただきます。　押忍！